

Title	土俗私考(中山太郎著, 坂本書店發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.4 (1926. 11) ,p.161(621)- 162(622)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19261100-0161">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19261100-0161</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

時に本書の序論に於て、此の種の文學的哲學的學派の理想と、現今の史學者間に一般に行はれてゐる抱負との主なる相異を鮮明にされてゐる。而して本書の全論文に一貫したる著者の立論は、即ち文學、哲學、及び歴史の緊密なる結合といふことであつて、これが唯に十八世紀だけの理想に止らずして、あらゆる時代に妥當すべき理想であるといふのである。

要するに、本書の主旨は、哲學と歴史の再結合を要するといふのであつて、然も今度は、哲學の方からよりも、寧ろ史學の方から結合が企てられねばならぬといふのである。そして、今日の歴史界には、此の試みが爲さるべき充分の余地が存するといふのである。

私は實に同感であつて、これは胸襟を開いて傾聴すべき議論だと思ふ。突差に書き出したので、充分著者の意見を紹介し得なかつたことは、著者並びに讀者諸賢に對して誠に濟まないと思ふ。

(山本光郎)

## 土俗私考

(中山太郎著  
板本書店發行)

最近、我國土俗に關する研究が大いに展開せられ、各種の研究書が公刊せられて來たのは、土俗に興味を持つ者の等しく欣喜する處である。本書は閑話叢書の一で、土俗學の旗頭として知られて居る中山太郎氏の近著である。自分は、今春四月阿波に旅行の節、東京驛の賣店でこれを求め、車中の本として面白く讀了した。それで次に本書の内容を極く簡単に紹介したいと思ふ。

元服の土俗と性の問題——我國太古より元服(成年式)の土俗は行はれ、その標式として割禮が施され、この「事が、標式の中心となつて居つたやうで、この風習は、既に、醫學、民間傳承學、古學の三方面より證明されて居るが、未だ土俗學方面より論議されて居らぬので、氏は其の專攻の同方面より、現に「體操禪觀」の儀式として殘つて居るものを擧げてこれを證明された。

性に關する迷信——これは更に、七難のそと、月のさわり、七夕祭は性的神事、双胎兒を殺す迷信、最も露骨なる迷信、各地に行はれた〇〇市、神の申し子、清少納言の末路、農業と性的祭り、根強き性の迷信とに分けて、興味深く説述せられた。この中「清少納言」の末路に於て、稀世の才女も、老後は都より阿波の里浦村に退いたが、この部落の姥櫻も、村の漁人には天女のやうに見えて朝夕執念深くつけ廻はされ、清女は遂に自ら與仁を挾りとり、之れを海中に投じて死んだ。これ、その海よりは、清女の與女に酷似した(貝恰)貝が捕れると。又同所の海濱近くに、清女の遺骸を葬つた、尼塚と云ふ丈近くの寶篋院塔がある。自分は今春阿波旅行の節、其所に立寄つたが、著者の説明通り、下の病にかゝつた男女の滿願奉納の腰布が、いと華かに巻きつけられて居た。案内の村人の談によると、尼塚は天塚で、承久の亂によつて此國に遷幸遂に崩じ給うた土御門天皇の御火葬塚で、毎歲開天皇崩御の日には、村民は、その傍の草薙にお籠りをし、又終夜盛んな參詣の人があるといふ。又一説には、この塚は、允恭天皇の十四年秋九月、天皇淡路島に獲を催せられた時、島神に捧げる珠をば、海底より獲て死んだ、海人男狭磯の墓とも言ひ傳へられて居

る。その家より少し離れた處に男狹礮碑がある。

聳いぢめ——處女を青年の共有視した時代に、聳と云ふ一人の男性に獨占せられるとしたならば、聳としては、獨占に伴ふ相當の義務を負担すべきは勿論であると同時に、その村の若者が、その聳に對して、一種の嫉妬を起すのも又當然の歸結で、聳いぢめは、斯くして發生した社會的の一現象であると論じ、各地殘存の類例を擧げてこれを説明せられた。

遊行婦考——遊行婦の意義を因襲的に解釋すると、阿曾比女、宇加禮女と云ふ娼婦であるが、此の解釋は徹底しない見方であつて、決して其の實際を説明したものでないと言つて置かれ、(一)遊行婦が、その始めに有してゐた職業は何であつたか。(二)遊行婦は、何故に娼婦と見做さるゝまでに變化したのであるか。(三)遊行婦が娼婦と遷り變る其の経路はどうであつたか。此の三問題に就いて詳述せられ居る。猶ほ、交通不便な時代に於て、都會生活の皮肉に食ひ込んで陰陽道の思想が、案外迅速に地方へ傳播され且つそれが故實を失はないで、堅く保存されてゐたのは、采女の名の下に、遊部の職務を行ふた變則の遊行婦と、小町の名に隠れた、多數の遊行婦の漂泊とによるものと説明せられて居る。

物の周りを廻る土俗——或る物を目標として廻る俗信に關して各地の例を擧げて説明してある。序で乍ら、阿波志に、前記アマ塚に就いて「毎秋七月舞踏以敬邊墓、七周、其辭爾雅可聽。」と附記されあつたのを記憶して居る。

消えずの燈——太古發火法が容易でない時代に、火を作る困難と、火を神聖な物とした思想とが綜合されて、益々火を保存する

やうに努め、この理由で、消えずの燈が起つたのと云ふ。又更に天津日繼の眞の意義に論及し、神聖なる火を繼いだと解釋する事が、土俗の上から妥當であると説明して居る。

コホロギ橋と袖モギさん——各地のコホロギ橋の由來を訊れ、更に袖モギさんの正體を突留めた。コホロギ橋は、コロビ橋の轉訛で、橋上で轉倒すると、凶事があると云ふ俗信に起因したものであつて、これと全く同じ思想に屬するものが、袖モギさんで、これは、板橋で轉倒すると、來るべき凶事の代として、衣の片袖を截つて、直ちに棄てる俗習で、この信仰は、既に萬葉時代に存して居つた事などを説明された、興味津々たる研究である。

以上は、自分の車中讀了の後、腦裡に存する處を書き綴つたものである。要するに本書は各地の資料を多く列擧してあるので、參考になる處多く、一讀の價値ある良著として敢て紹介する。

(武田勝藏)

## 體質人類學

(西村眞次著 早稻田大學出版部發行)

最近のわが學界の喜ばしき一つの傾向は、人類學に對する興味が、ますます一般的にならうとしつゝあることである。けれど人類に對する正しき理解は、吾々の人生觀をして健全なるものとならしめ、吾々の生活意識をして明確ならしめ、その行動を正しきにみちびくからであつて、あらゆる學問が、人類及びその生活に關係を有するかぎり、人類についての知識は、あらゆる學問の研究の基本とならねばならない。しかし人類は、スフィンクスの謎